

Title	経済学の現実的出発点について - 資本主義の経済法則における論理的なものと歴史的なもの(四) -
Author(s)	吉村, 達次
Citation	経済論叢 (1961), 87(4): 267-287
Issue Date	1961-04
URL	http://dx.doi.org/10.14989/132818
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第八十七卷 第四號

経済学の現実的出発点について……吉 村 達 次 1

ダニエル・デフォウの簿記論……高 寺 貞 男 22

ツイーシャンクの国家独占

資本主義論について……池 上 惇 38

イギリス革命の農業・土地問題

解決とその歴史的意義……尾 崎 芳 治 54

昭和三十六年四月

京都大學經濟學會

経済学の現実的出发点について

——資本主義の経済法則における論理的なものと歴史的なもの(四)——

吉 村 達 次

七

一 「資本論」の窮局の目的は、「近代的社会の経済的運動法則」を暴露することにあるが、この法則は、「諸現象が一の完成形態を有する……かぎりにおいて、それらの諸現象を支配している法則」を意味するだけでなく、「一の形態から他の形態への移行の法則」をも意味しており、これら二つの法則の統一——この統一は運動の原動力を資本主義の基本矛盾に見出すことによつて可能となる——としては、「社会的有機体の発生・実存・発展・死滅の法則」として一層具体的に規定される。この規定は、さきの二つの法則のうち、前者の法則——運動の循環的な側面をあらわす——よりも後者の法則——運動の発展的な側面をあらわす——が一層高次なことをしめすものであり、このより高次な法則を明らかにするところまで経済学を前進せしめたところに、マルクス経済学の最大の特徴があったのである。しかるに、このような根本的特徴が、具体的に、「資本論」のなかで、どのようにしめされているかという点になると、必ずしも明確にされているとはいひ難く、極端な場合には、例えば宇野教授のように、

かの「経済的運動法則」が「資本主義の生成・発展・消滅の法則」を意味しないと断定され、マルクス経済学の弁証法的性格を事実上否認する意見まででてくる始末である。

〔註〕なお、宇野教授はその「独特」の「経済原論」において、いわゆるトリアーデ形式をつかって理論を展開しておられるが、それが如何に弁証法としての実質を骨抜きにした形骸にすぎないかは、別に論証するべきであるが、右の意見のごときも、この形骸化の必然的帰結である。ついでにいえば、宇野教授の「弁証法」は、単に閉鎖的な体系しか生み出しえない観念的なものであるにとどまらず、ヘーゲルほどの客観性をもたない、主観的なものであることに注意しなければならない。教授が「現状分析」の必要を強調されているにもかかわらずそうである。むしろそれだけ原理論を観念的世界に閉ちこめておくことの禍害は大きい。

経済学の内容をなす「法則」が、右のような性格をもつとすれば、それを明らかにするための方法論も、おのづからその性格によつて規定されざるをえない。運動の循環的側面だけを抽象して、そこでの諸契機の静止的な内的連関法則を明らかにし、ついで、それを媒介として、諸契機の本質的な変化・移行と、移行形態の法則を定めし、移行の現実過程の一般的特徴を明らかにするところまで進む、という順序をとらざるをえない。重要な点は、このような順序が不可避であるとともに、この最後の点まで原理的展開が可能であるし、またなされねばならないということである。それにもかかわらず、不斷に変化する過程を、一たん循環的・静止的（本質的な発展をふくまないという意味で）側面だけで捉えざるをえない事実的・論理的根拠は、運動そのものがこの循環的側面を運動の契機として欠くことができないものとしてふくんでゐるからであり、また、諸範疇を純粹に把握するためにも不可欠だからである。この静止的側面を絶対化したとはいえ、古典学派が多くの特れた科学的発見をなした所以である。したがって、事物をその静止的側面において捉らえることが一般に間違いではなく、むしろ、それは一定の範囲

内で有用ですらあるが、ただ、そのような把握を媒介にして、一見絶対的と見えた本質そのものの変化・発展的關係にまで、より深く立入り、その相対性を明らかにすることが重要なのである。このようにして、はじめて、循環的運動を突破しながら発展するものとして、全運動過程が、その具体性において把握されうるのである。

このような観点から、これまで、主として、「資本論」第二章「いわゆる本源的蓄積過程」が、近代社会の経済的運動法則を明らかにするうえに、如何に決定的な意義を有するかを論証しようと努めてきたのであるが、最後に、もう一つの問題がのこっている。「第二章」の大部分をしめている資本発生史の分析は、きわめて豊富な歴史的資料にもとづいて詳細な叙述がなされているのに、資本の消滅過程——いわゆる「第二の否定」については、簡単な一般的叙述があるだけで、その対照は著しい。この理由を検討することが必要である。何故なら、それによって、既存の「資本論」体系自身の歴史的制限が問われることになるであろうし、さらに発展して、今日の資本主義経済もしくは世界経済の発展段階において、マルクス経済学の原理的展開がどのような方法的視角で行われるべきであるか、その際に「資本論」でしめされた経済学の方法が有効なものとして働く力をもっているか、を示唆しうるからである。

二 さて、右の理由として二つが考えられる。

第一に、これは当然のことながら、マルクスも彼の生きた時代の制約を脱れることができないということである。マルクスにとって、資本の発生史はすでに歴史的事実としてあたえられており、歴史的事実をもとにして移行過程そのものの分析・叙述が可能であった。それに反して、資本の崩壊過程については、まったく異った事情にあった。当時すでに崩壊を可能ならしめる諸条件はあたえられており、また、この可能性を現実性に転化すべき主体的・

客体的条件も一般的にはしめされえたが、革命をさし迫った現実の問題として提起しうる歴史的諸条件はなお成熟しておらず、まして、今日のように、世界の三分の一を占める地域に社会主義社会が確立し、資本主義から社会主義への移行が歴史的事実としてあたえられていなかったのであるから、一般的な見透しをのべるにとどまるのもやむをえなかったし、またそれが科学的に正しい態度でもあった。

しかしながら、マルクスのこうした配慮が当然そうあるべきものとすれば、逆に、次のことも同じ当然さをもっているであろう。すなわち、現在では、すでに第二の否定の過程が現実に行進しているのであるから、この過程についても、歴史的事実にもとづいた一層詳細な分析と叙述をあたえうるはずであるし、また、そうすべきであろうということである。これは、単なる思いつきや興味の問題ではなく、マルクス経済学の原理の本質からしてそうあるべきものと考えられるのである。何故なら、形而上学的な立場からは、原理的体系はそれ自身で完結せるもの、永遠に完成せるものとして存在するのに、マルクス主義の立場では、理論は、つねに発展してやまない現実のなかで試され、具体化されねばならず、その意味では、永遠に完結することなく展開されねばならないからである。法則は、新しく生起する諸現象のなかを貫徹することによって、自己の普遍性を不断に実証しなければならぬが、それは、また、多様な新現象を自己の中に包接してゆくことであり、より豊かな内容をもつ多様の統一として自己を完成してゆくことでもある。法則は、新しい現象をも包接して自己の普遍を実証したかぎり、旧事実にもとづいてのみあたえられた普遍性を相対的なもの特殊なものとして限定しつつ、それを越えたより普遍的な・より絶対的な法則としての意義をもつようになる。これが法則の力であり、内に潜めた可能性の発現である。このような法則を論理的に把握したものが、原理的体系であるとすれば、原理論自体が段階論を——したがって歴史的なものを

——包接しつつ展開されうるものとなる。

また、これらのことは、原理論の展開が「現状」の進展に応じてのみ可能であるということ、逆に原理論は「現状」を包摂しうるし、また包摂しなければならぬことをしめすものでもあるだろう。この両者——段階的發展と現在——の統一的把握が決定的な重要性をもつことに注意しなければならない。

〔註〕このように原理論は歴史を包摂し「現状」を包摂しつつ原理的体系を構成しなければならないから、その経済史学や現状分析に対しても有効でありうるのである。しかし、このことは、原理論が後二者に対して相対的に独自の領域を構成すること否定するものではない。

第二の理由は、第一の理由を前提したうえのことであるが、この「第二章」は、資本主義経済の本質的側面である直接的生産過程を取扱った「資本論第一巻」の範囲に属しており、その限界内で論理的・歴史的展開が行われているのであるから、移行の主體的・客体的条件にしても、移行の本質的契機としての側面だけが指摘されているだけで、「資本論」の枠内からいっても、なお一般的・抽象的に取扱われているにすぎない、ということである。資本発生史の分析にしても、ここでは、生産関係の移行を直接的にひき起すような、生産手段（主として土地）および資本（主として貨幣資本）の根本的な再分配に直接つながる階級闘争、新たに支配階級たるべきものによるそれらの強力的取奪過程が、分析されているだけで、もとより、それが本源的蓄積過程のすべてをしめすわけではない。それはこの過程を本質的に規定しているにすぎない。したがって、この過程についても、「資本論」体系が抽象より具体へ・本質から現象形態へ——第一巻から第二巻・第三巻へ——とすすむにつれて、資本発生史の他の側面が一層具体的に分析されねばならないはずだし、また分析されてもいる。ただし「資本論」の一構成分子としての性格上、この歴史過程の全容があたえられるのではなく、資本の発生史という限定された角度からにすぎず、そ

れに必要なかぎり封建制についてもふれられるにすぎないことはいうまでもない。

「第二の否定」の過程についても同じことがいいうるであろう。「資本論」体系の論理的展開とともに、移行の諸契機の様々な側面がしめされてよいはずであろう。そこで、次に、当時において、原理論の範囲内でこの具体化がどこまですすめられえたか、が検討されねばならない。ただし、この場合にも、当然マルクスが生きた時代の制限が大前提として存在することはいうまでもない。

三 人間の認識が所与の歴史的諸条件の制約をうけるということは、理論の発展が根本的には歴史的現実を飛び越ええないという意味で、消極的制限であるが、逆に、そのことから、歴史が不断により複雑な・より豊かな発展を遂げるにつれて、人間の認識も現実を理論的に把握するより複雑かつより豊かな能力を獲得しうる、といえるすれば、それは歴史の発展に照応する理論の発展の無限の可能性をしめすものにほかならないわけであり、かの制限は積極的な反面をもつことになるであろう。

マルクスは歴史創造の主体たる人間が、その歴史的課題を如何にして自らに提起してゆくかを、次のようにのべている。

「人類は解決することのできる課題だけを提起する。なぜなら、くわしく検討すればつねに明らかになるように、その課題それ自身は、それを解決する物質的条件がすでに存在しているか、あるいはすくなくともその条件が形成の過程にある場合にのみ生ずるからである。」

マルクスは周知のように、「資本論」の「第二版への跋」において、ブルジョア経済学の俗流化とプロレタリア経済学の成立の歴史的背景を、次のようにのべている。ブルジョアジーの理論的代弁者たるイギリスの古典派経済

学が科学的たりえたのは、その独創的先達、が理論的活動を行った時期には、ブルジョアとプロレタリアートの闘争がなお未発展で、歴史の表舞台では、産業ブルジョアと貴族の大地主層の闘争が主役を演じてをり、そのかぎりではブルジョアが歴史の進歩的側面を代表していたからである。一八二五年の恐慌によって、イギリスの資本主義経済は「その近代的生活の周期的循環」を開始し、その完全な成熟を証明したにもかかわらず、そうであつた。しかし、一八三〇年以後、ブルジョアが政治的権力を奪取してからは、事情は一変し、「(ブルジョアとプロレタリアートの)階級闘争が実践のおよび理論的にますます公然かつ威嚇的な諸形態をとつた。それは科学的ブルジョアの葬銃を鳴らした」。ブルジョアは弁護論的経済学を要求し、プロレタリアートは科学的経済学を要求するようになった。前者が、現実の矛盾に眼をふさぎ、資本主義的秩序を社会的生産の「絶対的で窮局的な姿態」と解することに利益を感じ、後者が、矛盾に眼を開けることなく、資本主義を人類社会の歴史的・一時的な段階にすぎないもの解することに利益を感じとるようになったからである。

念のためにいえば、一方を弁護論的経済学といい、他方を科学的経済学といっても、経済学の根本的性格についていうことであつて、個々の経済学の問題については、いわゆる俗流経済学においても多くの発展が見られたことは、その後の経過がしめすとおりであり、また、プロレタリア経済学においても、なお多くの未発展の部分をしてしていることはいうまでもない。資本家階級も、経済的実践活動においてその欲求をより有効にみたそうと思えば、その行動に何らかの程度で科学性を必要とせざるをえないのであるから、彼等の階級的利害の根本にふれないかぎり、科学的な理論をも受け入れざるをえない。もちろん、根本的性格が弁護論的たらざるをえない以上、たとえ理論的要求から個別的問題を全体との関連において説明する——これは科学的理論の必然的要求であるが——必要が

生じた場合でも、その根本的性格によつて制約されねばならないし、それに制約されるかぎり、個別的命題の理論的説明も何らかの歪みをうけざるをえない。したがつて、彼等によつて発見された個別的真理でも、それを科学的により洗練されたものにするためには、根本的な再検討が必要であり、諸概念・諸範疇が徹底的に鍛え直されねばならないことはいうまでもない。マルクスが古典学派の労働価値説を継承したさいに、労働・価値・価格等の諸範疇を科学的理論に耐えうるように徹底的に再検討し、それをもとにして資本主義の運命について古典学派とは全く反対の結論を引きだしたやり方は、模範的なものといふことができるであらう。他方、プロレタリアートの側では、ブルジョア社会との根本的対立が漸次明確となり、彼等が近代社会における基本的な政治勢力として成長するにつれて、科学的なしたがつて批判的・革命的な理論が要求され、その理論の基本的確立は彼等の階級的成長に決定的な役割を果たしたのであるが、個々の経済学的命題の一層精密な研究となれば、多くの場合階級対立が發展して一層複雑・多岐にわたる闘争を展開するようになって、はじめて促進されるのが通例である。もちろん、このような理論と実践の發展における相互制約関係はごく一般的のみにあつて、理論の發展には相対的に独自の動力があり、現実にはジグザグの過程をたどることは、いうまでもないであらう。

それはともかく、ここで重要なことは、科学的理論の要求が特定の階級的立場とかく結びついているのみならず、階級闘争の發展の度合にも依存していることを、マルクスが古典的なかたちでしめしていることである。すなわち、階級社会においては、諸個人がしめる社会的地位に応じて、所与の社会に対する「見方」もおのづから両極的に対立したものとならざるをえないことから、彼等の要求する理論の性格までが異つたものとならざるをえないのである。

「所有者階級もプロレタリアートの階級も、おなじく人間の自己の疎外をしめしている。しかし、第一の階級は、この自己疎外のうちでみづから安穩と保証を感じ、この疎外を自己に適した力として知り、そのうちにある人間的な生存のみせかけをもっている。第二の階級は、この疎外のうちにみづから遺憾を感じ、そのうちにみづからの無力とある非人間的な生存の現実をみる。この階級はヘーゲルの表現をもちいれば、永却の罰のうちに於いての永却の罰への反逆であり、この反逆たるや、彼等の人間性と、この人間性の公然たる決定的な広大な否認である彼らの生活状態とのあいだの矛盾によって、必然的にひきおこされるものなのだ。

それ故に、対立の内部では私有財産所有者は保守的党派であり、プロレタリアは破壊的な党派である。前者からは対立維持の活動がおこり、後者からは対立破壊の活動がおこる。」(大月書店版 マル・エン選集補巻一「神聖家族」)

労働者階級は、資本主義的体制の結果として、彼等に押しつけられる生存の困難(Not)のゆえに、その困難に立ち向(wenden gegen)わざるをえない必然性におかれる。この困難に立ち向い、それを転換することが、彼等の生活そのものから要請される。彼等は、実践的に、資本主義体制の根本的変革にすむだけでなく、その意識——社会の見方——においても、資本主義を絶対的・固定的なものとするそれまでの支配的観念——支配階級によって創りあげられ、労働者階級をも支配していた観念——を根本的に変革する必要に迫られる。もとより、このような変革的な見方と保守的な見方の対立は、それが単なる見方の対立にとどまるかぎり、どこまでも外的であり、どちらの見方も立場の相違という相対性を脱れず、変革的な見方といえども、なお、弁証法的な正しい世界観として確固たる真理性をもつものとはいえない。しかし、この「見方」は直接変革的实践を導くものとしてのみ、人間の意識に生ずるものであるから、不可避免的に実践のなかでその真理性を検討されざるをえないという性質をもっている。

「見方」そのものの実践的性格によって、理論的洗練が要求され、そうして獲られた理論によって、両者の見方とその対立の客観的根拠がしめされ、その対立の解決が変革的な見方・実践の優位において解決される根拠もしめされ

る。ただし、このような「見方」の実践的性格は、階級的な「見方」としてのみあたえられ、個々人の主観的、偶然的なそれではない。このように、階級的な生活とそこから生ずる「見方」は、資本主義を固定的に見る従来の経済学に満足できず、理論的武器を根本から鍛え直して、資本主義経済の根底を理論的によりふかく探る動機をあたえるのである。この動機につきうごかされて、理論が、資本主義経済の原動力としての基本的矛盾を発見し、それを基礎として、全経済機構の内的編成を論理的に再構成しえたときに、現存するものの肯定的な理解のうちに、同時にその否定的理解をも包含するところの、弁証法的な性格をもった新たな経済学がはじめて出現したのである。

四 このような変革的な「見方」は、端初的にはあるいは現実的には、労働者階級の諸要求として提起される。しかるに、これらの要求は、資本主義社会の矛盾が複雑・多岐であればあるだけ、それだけ多様なかたちで現れざるをえないが、他方では、それらの社会的諸矛盾は資本主義の基本的矛盾によって規制されてをり、したがって、彼等の諸要求も必然的に現存体制の根本的変革の要求につながざるをえない。ここから、また根本的な要求のための闘争を飛躍的に前進させるうに、決定的な役割を果たすような要求を見出すことが、重要な意味をもってくる。それは、一般的には、それぞれの時期に諸矛盾の集中心となることによって、労働者の生活を危機の極限にまで追いこむような、したがって労働者階級のエネルギーがもつとも強烈に爆発しやすいような矛盾、および、それを反映するような要求であるといえよう。「それぞれの時期に」といったのは、資本主義の根本矛盾の発展・激化の度合によって、その個々のなまた集中的な発現形態がかわるからである。このような矛盾は、毛沢東が「矛盾論」において、主要矛盾として、従属的矛盾や基本的矛盾と区別して、しめたものにはかならないであろう。

この主要な矛盾を正しく発見することが、実践的に如何に重要な意義をもつかは、今日誰しも認めるところであ

るが、理論的分析の前進にとつても決定的な意義をもっている。主要な矛盾の存在は、基本的な矛盾が、その根本的解決のための主要な環たるべきものを、自己の胎内から生みだすほどにまですでに成熟してをり、したがって、主要な矛盾を表現している要求のための闘争が「根本的」要求のための闘争に転化しうる客観的諸条件も、すでにあたえられていることをしめしている。このことからして、逆に、理論がこの主要な矛盾・要求を手がかりとして資本主義経済の複雑な網の目をたどるならば、必ず基本的矛盾にたどりつきうるはずだという推論も許されるであろう。また、単に基本的矛盾一般ではなく、それぞれの時期における主要矛盾に対応するところの、特定の成熟度に達した基本矛盾の特殊性をも明らかにしうるであらうし、それらの主要矛盾のおののを、基本的矛盾が特殊な成熟度に達していることの特異な集中的発現形態として、すなわち、資本主義の発展段階を区別する現実的標識として把握することによって、それらの諸段階の継起の必然をも、把握することができるであらう。このように、理論が、両矛盾の内的連関を正しく把握しえたならば、それは、とりもなおさず、資本主義の経済的運動法則の全発展段階とその転換過程を包括するところの、動的な姿容をもつ体系となるであらう。

このように、主要矛盾が理論的探求に対して、現実的にあたえられる出発点であるとすれば、論理の道程は、主要な矛盾から基本的な矛盾へと下向し、ついで、基本的矛盾から主要な矛盾へと上向し、出発点に復帰するところの、円環運動となるであらう。さらに、この復帰点においては、主要な矛盾は基本矛盾を飛躍的に激化させ、移行の諸条件を発展させる主要な環として立現れることによって、理論は、円環的運動を含みつつ、つねにそれを突破して前進する螺旋運動の性格をもつものとなるであらう。

五 つぎに、マルクスが「資本論」もしくは「経済学体系」——プランの形でしかのこされていないが——にお

いて、当時の主要矛盾と基本矛盾の弁証法的関係をどのように具体的に展開しているかをみよう。さきにふれた「資本論」「第二版の跋」の末尾に、弁証法の特徴が批判的・革命的な性格にあることをのべたのちに、つぎのうにいつているのは示唆的である。

「資本主義社会の矛盾に充ちた運動は、実践的ブルジョアにとっては、近代的産業が通過する週期的循環の浮沈においても最も痛切に感じられるのであって、その浮沈の頂点は、——一般的恐慌である。この一般的恐慌は、まだ前段階にあるとはいえず、ふたたび進行中なのであって、その舞台の全面性ならびにその作用の強さにより、神聖プロシア・ドイツ新帝国の成金たちには弁証法をたきこむであろう。」（長谷部訳資本論第一巻第一分冊一三六頁）

ここでマルクスは、全般的過剰生産恐慌は、ブルジョアに対してさえ、否定なしに、資本主義の須臾的・過渡的な、弁証法的な本質を認めざるをえなくすること、彼等は、その瞬間から真理に眼をとち、弁証論的経済学に懇めを見出さざるをえなくなることに反して、プロレタリアートは、この真理を徹底的に追求し、恐慌を資本主義の歴史的運命と結びつけて理解することにはささかの躊躇もしめさないこと、歴史上はじめて徹底的に科学的な経済学を要求するにいたったことをのべているのであるが、資本主義経済のあらゆる矛盾の集中的爆発であるところの、全般的過剰生産恐慌と、経済学における弁証法的・科学的方法の確立とを有機的に結びつけて理解していることに、ここでは特に注意しなければならない。

また、「共産党宣言」において、恐慌が労働者階級の階級的自覚の発展にとって決定的な意義をもつことを、つぎのようにのべている。宣言の第一章において、ブルジョア階級とプロレタリア階級が封建制の殻を破って成長してくる歴史的過程をのべたのちに、現在では、資本主義自身が自ら生みだした生産力の発展にとって障害物に転化し、やがては、社会主義に道をゆづらねばならない必然性にあり、ブルジョア階級は、今や、封建的支配階級がた

どつたと同じ没落の運命にあること、等々を雄渾な筆致でえがきだしているが、その終りのところで、この資本主義崩壊の必然性を誰の眼にも疑いえないような赤裸々な姿でしめすものこそ、過剰生産恐慌にはかならないとして、その歴史的意義を次のように述べている。

「商業恐慌にさいしては、生産された生産物の大部分だけではなく、すでにつくりだされている。……生産諸力の大部分までも週期的に破壊される。ブルジョアジーは何によつてこの恐慌をきりぬけるか？ 一方ではおびただしい生産力のやむをえない破壊により、他方では新市場の獲得と旧市場のいつそう徹底的な利用によつて。すなわち、より全面的な、より強暴な恐慌を準備し、恐慌を予防する手段を少くすることによつて。

ブルジョアジーが封建制度をうちおしたその武器（生産力——引用者）は、いまやブルジョアジー自身にむけられている。しかもブルジョアジーは、自分に死をもたらす武器をつくったばかりではなく、この武器をとる人々をもうみだした。すなわち近代的労働者階級、プロレタリアを。」（大月版マルクス・エンゲルス選集第二巻四九六頁）

このように、恐慌が如何に資本主義の根本矛盾を白日の下に暴露するかをのべたのちに、この矛盾の爆発に対す、ブルジョアジーとプロレタリアートの対応の仕方の根本的な差違を、基本矛盾を「解決」するためにとるところの、一方の反動的・一時的なやり方に対し、他方の革命的・根本的な態度の相違として特徴づけ、さらにその叙述につづけて、プロレタリアートの政治的団結・自覚が闘争の中で増大してゆく過程をかなり詳しくのべ、世界革命の展望にまで説きおよんでいるのであるが、ここでは、明瞭に、恐慌が労働者階級の革命的自覚に結びつけられその自覚を急速に発展させる主要な要因とされていることに注意しなければならない。もちろん、このような恐慌と労働者階級の階級的自覚の成長の関係は、一般的にいえるにすぎないのであつて、機械的に理解されてはならない。さらに「資本論」第二版への跋において、一八二五年の恐慌にもかかわらず、当時階級闘争の主役は産業資

本家と地主貴族であり、労働者階級はなお独立の政治勢力として立現れなかったし、したがって、彼等は自己のための科学を要求するまでにいたらなかった、彼等がやつとそれを要求しはじめたのは、一八三〇年以後、ブルジョアジーが権力をとり、労働者階級が歴史の一方の主役たる地位をはっきりしめすようになってからであった、とのべているように、現実には、両者は必ずしも直接に結びつくものではない。けれども、労資の階級闘争が歴史の主役となるにいたった基本的な根拠が、周期的恐慌を体験するほどにまで成長した資本主義経済の矛盾にあること、このように成熟した矛盾が労働者を政治の舞台に押し出した根本原因であることにかわりはない。したがって、この当時における階級闘争の激化の一般的な根拠を探求する手がかりを、まず恐慌に求めることは正しいとみなければならない。

六 このように見てくれば、マルクスが、経済学体系プラン（「経済学批判」序説のものを指す）において、恐慌を篇別構成の最後においた意味を改めて考えてみる必要がある。マルクス自身の説明を見よう。マルクスは、右のプランにもとづいて執筆した「経済学批判要綱」（草稿だけがのこっている）の第一ノートの末尾に、プランに対する説明の一文をつけ加えているが、ここでは、次のようにいつている。

「交換価値、貨幣、価格が考察されるこの篇では、商品がつねに実存するものとして現れる。……したがって、生産の内的組成が第二篇を、國家への総括が第三篇を、國際的關係が第四篇を、世界市場が終篇を形成する。世界市場では生産は全体として描定されている。その諸契機（カギ）の各々も同様である。しかし世界市場では同時にすべての矛盾が過程に登場する。そこで世界市場は、ふたたび同じように全体の前提と、全体の担い手となるのである。つぎに恐慌は前提をこえる、一般的な指示であり、一つの新しい、歴史的姿態の採用にたいする、強要である。」（Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, s. 139）

経済学プランが、「資本一般」から「世界市場—恐慌」にいたるまで、原理論的展開の可能なものとして考えられているとすれば、それにしめされる篇別構成は、「経済的諸範疇」が近代社会のなかでしめる相互に対する關係

によつて、その地位を規定されてゐるところの、論理的な順序をしめすものである。そして、抽象から具体へと進む論理的進行の頂点に、「恐慌」の項目がおかれてゐるのである。

基本矛盾の展開が恐慌にまでいたる過程の概観を試みれば、次のようになるであらう。

資本主義の基本矛盾は、機械制大工業が生産における支配的形態となり、相対的剰余価値が剰余価値生産の主要な要素となるとともに、確立される。それは、資本制生産様式が、独自の生産様式として完全に成長を遂げし、自己自身の手で生産した剰余価値の蓄積によつて、自己を無限に拡大再生産してゆく可能性をえたことでもあるが、同時に、基本矛盾自身の拡大再生産でもあり、資本蓄積の進行とともに富と貧困の敵対的対立となつて現れざるをえない。この貧富の対立は、基本的矛盾のもつとも一般的な発現形態であり、内的対立の外的対立への転化であると同時に富裕な資本家の存が、在と貧困な労働者の存在は資本制生産の前提である。こうして資本制生産は、自己自身的前提を不斷に拡大再生産しつつ、無限に拡張される。だが、この進行が、反面では、変革の主體的・客体的条件を鍛えあげることはいふまでもない。

次に、社会的総資本の再生産と流通の法則は、基本矛盾を社会的規模における生産と消費の矛盾として現れしめ、全般的過剰生産の實在的可能性を成熟せしめる。再生産の諸条件に媒介されて、全般的過剰生産として爆発せざるをえないところの、全社会的な生産と消費の矛盾が発展し、富と貧困の対立はより広汎・深刻になり、より複雑な様相を呈して現れる。諸資本の競争を規制するところの利潤率平均化の法則と、利潤率の傾向的低下の法則は、生産力の発展と資本の蓄積が、社会的再生産の軌道をつねに攪乱するような資本の競争を激化し、そこから生ずる社会的生産の不均衡によつて必然的に生産と消費の矛盾を爆発せしめる。そして、資本の過剰と人口の過剰という事

態を周期的にもたらし、富と貧困の対立を急激に且大量的に促進する。

資本家階級は、恐慌に集中的にしめされる諸矛盾の負担を労働者階級の肩により多く転嫁するために、また、労働者の不満を抑圧して資本制生産の前提として必要な貧困な労働者を確保するためにも、国家による強制手段を利用せざるをえない。また、資本蓄積を促進するためにも国家の強力が利用される。この国家権力の利用は、かつて資本家階級が封建的階級に対して勝利を与えるための決定的手段であり、(市民革命以後、資本家階級の封建的土地所有に対する闘争は決的強制力を通じて行われるようになった)、資本主義が確立してのちは、資本主義が矛盾を露呈することにも、資本家階級の労働者階級に対する闘争の、もっとも強力な手段となった。このように、国家は、資本家階級の経済的支配の不可欠のかつ必然的な用具であるが、しかしやはり、補助的な用具ではない。主要なものはいくまでもなく資本制的生産関係そのものである(国家独占資本主義の段階においてもこの一般的性質はかわらない。ただ、国家のほとんど全面的な機能が、恒常的に、直接経済的機能を果たすために利用されるという点が異なる)。しかし、国家の経済的機能は恐慌を解決するどころか、恐慌を一層激化する。また、恐慌の渦中で生活の危機と闘う労働者階級の闘争を、政治的なものに転化する一要因となる。資本主義経済が国民経済として一単位を構成することから、階級対立は、国家の経済政策に対する利害の対立として政治的性質をもたざるをえなくなる。また、国民経済的展望をもった闘争の形態が不可避なものとなる。

国民経済を構成単位として形成される世界経済は、諸国民間の国際的な経済的關係を通じて、独自の運動形態をしめす。先進資本主義国のあいだの発展の不均等性は、国際的競争を激化せしめるだけでなく、国民経済内部へ反作用し、一国の資本相互の競争・対立を促進する。また、世界の諸地域を先進国、中進国、後進国に転化せしめる

傾向を生じ、これら相互の対立関係は世界經濟に特殊な矛盾を發展させる。もちろん、これらの諸矛盾・諸対立は、根本的には、資本の目的が利潤追求にあることから、一方では、利潤のためには一切の地域的・民族的制限を突破する世界的性格と、他方では、それを競争を通じてのみ実現せざるをえないために、競争に優位をしめる手段として地域的・民族的市場の独占に固執せざるをえないという偏狭性（ここから対外的進出が侵略という形をとらざるをえない）、を資本が同時に兼ねそなえていることに由来する。それはともあれ、このような資本主義世界經濟の特殊性は、矛盾が世界的規模で現れざるをえない必然性と、諸國民經濟の対立を通じて現れざるをえないという發現形態の特殊性を規定する。それとともに、恐慌もまた世界的性格をもち、それらの世界的諸対立を激化する。富と貧困の対立は國際的規模で複雑な形をとって進行する。世界經濟の結合と対立が一層發展するにつれて、矛盾の發現およびその負担は特定の地域に集中的に皺寄せされる。とはいえ、これらは、労働者階級と資本家階級の闘争を國際的規模に發展させるとともに、労働者階級に世界史の現実的な担当者たるべき自覚と能力をあたえる。

このように、論理の終結点としての「恐慌」は、マルクスのいうように「前提をこえる一般的な指示」であり、「新しい歴史的姿態の採用に対する強要」であり、未来への出発点を内に含むものである。論理体系の完結は、同時に、体系そのものの崩壊を指示するものとなっているわけである。

さらに、さきに引用した「共産黨宣言」の文章につづいて、詳しくのべられているように、恐慌は当時におけるあらゆる矛盾の集中的爆發の唯一の形態として、労働者階級がそのために苦んでいる諸矛盾の全容を、あますところなく露呈する。そして、それと闘う労働者階級の大量的かつ急激な自覚の条件をつくりだす。「資本論」第一卷末尾においては、労働者階級は革命の主体としてはなお抽象的にしかしめられなかったが、ここでは、現実には革命

を遂行する主体としての諸条件を身につけた階級としてしめされる。すなわち、個々の労働者や個々の指導者が、如何に労働者階級の歴史的使命を自覚したとしても、それだけではそのような使命を遂行すべきは、ずの労働者階級が存在しているというにすぎない。労働者が、大量的にその使命を自覚し、その自覚にもとづいて行動するようにならなければ、現実には革命を遂行する能力をもったとはいえない。しかるに、基本的矛盾の結果として必然的に貧富の対立が生じ、貧困に対して労働者が闘争に立上ったとしても、そこから直ちに貧苦の原因を資本主義の本質そのものに見出すようになるわけではない。労働者の貧困は一般に資本主義の結果であり、その結果に対してだけ闘うことになるからである。しかし、世界恐慌のような極端な生活の危機が大量の労働者を急激に巻き込む恐慌の瞬間においては、基本的矛盾自身が資本の過剰と人口の過剰という現象の中にその姿を曝し、資本主義体制が自己の生み出した巨大な生産諸力——労働力と生産手段——を利用しえなくなったことが誰の眼にも明らかになる。これによって、主要な矛盾としての恐慌と資本主義の基本矛盾の関連を否心なく追求せざるをえない客観的条件が提供される。このような客観的条件が繰り返し生じ、それに不断の主体的活動が加つて、労働者の大量的自覚がはじめて可能になるのである。また、労働者階級だけでなく、恐慌を頂点とする資本主義の諸矛盾のなかで、次第に資本家階級との対立を深めてゆく小市民層や農民およびルンペン・プロレタリアートの傾向もしめされ、革命の主体的勢力は、当時すでに基本的にはあたらえられていることもしめされているのである。

このように「宣言」が「プロレタリアートの発展のもつとも一般的諸段階をのべながら」……「現代社会内部の多かれ少かれ隠蔽された内乱が、公然たる革命となって爆発し、ブルジョアシーの暴力的転覆によってプロレタリアートが支配権をうちたてるところまであとづけた」ように、基本的矛盾から世界恐慌まで上昇する資本主義経

済の分析によつて、最後に變革の主體的・客體的諸条件を、恐慌が一般的な——世界的發展という点から見て——主要矛盾であつた当時としては、考へうるもつとも具體的なすがたで、——もちろん原理的体系の範囲内ではあるが——せめすことができたと推測されるのである。

以上、要するに、マルクスも避けえなかつた時代的制約は、彼の經濟学体系においては、まず當時の資本主義の發展段階を特徴づける主要な矛盾が恐慌であり、したがつて、恐慌を出発点とし、かつ終点とする論理展開を行わざるをえなかつたという点に現れている。しかし、反面では、マルクスは、まさに恐慌に分析の出発点を見出しえたからこそ、その結論において、未來への確固たる展望を具體的かつ法則的にしめす可能性をつかみえたのであつて、古典学派や空想的社會主義者に比して、經濟学の理論を飛躍的に發展させうる客觀的条件をあたえられていたと見ることもできるのである。もとより、單に恐慌という現象があたえられているというだけでは、不充分で、マルクスが労働者階級の立場に立ち、労働者の苦悩から資本主義分析の動機をうけとつたということがなければ、恐慌を如何に分析するかという姿勢を、端初において確立することができなかつたであらう。

七 このように、經濟学の原理が、理論的分析の現實的出發点を、それぞれの時代を特徴づける主要矛盾に求めねばならないことは、この主要矛盾が資本主義の發展とともに變化するに應じて、出發点を移動させねばならないことを意味する。しかし、これによつて、原理的体系は、つねに資本主義經濟の歴史的發展段階をそのなかに包接しつづ、不斷に自己を發展させることができるし、また現實の有効性を実証することもできるのである。

〔註〕理論の現實的出發点は具體から抽象への下向過程の出發点たる「具體的なもの」を意味し、これに対して、論理それ自体の出發点は別に存在しなければならない。いうまでもなく、抽象から具體への上向過程における「抽象的なもの」であり、資本論では「商品」である。

そこで、次のことがいえる。帝国主義段階においては、理論的分析の出発点は、当時におけるあらゆる矛盾の集中点たる帝国主義戦争に現れる矛盾である。それは、先進資本主義諸国間の不均等発展の法則の結果としての諸国間の対立である。この点から見れば、恐慌はすでに諸矛盾の集中的表現としては二次的な意味しかもたないものになっている。ところで、レーニンは、この不均等発展の法則を単に帝国主義戦争を不可避とする側面からだけ見ず、一国における社会主義革命の可能性をしめす側面からも見ていた。換言すれば、主要矛盾をつねに基本的矛盾と結びつけて見てをり、右のレーニンの命題は、帝国主義段階にそれを適用し具体化した結論であるといえる。

この主要矛盾から引き起される主要な対立は、矛盾の解決を戦争にもとめる独占資本家階級と、平和を要求する人民大衆の対立である。ただ、当時の両勢力の力関係からして、平和は一国または数国において、戦争を内乱に、つまり革命に転化して戦線から脱けだす以外になかった。平和の要求は直接社会主義革命の要求につながった。

さらに、現在ではどうか。今日では、一国における社会主義革命の可能性が存在するというだけでなく、世界の三分の一において、社会主義社会への移行が現実のものとなり、さらに、他の地域でも進行しつつある。また、社会主義諸国が資本主義世界体制に対して、独自の世界体制を形成しており、世界史の発展はこの対立を主要な動力として動いているが、この対立において、主導権をもつものは、もはや、資本主義体制ではなく、社会主義体制である。さらに、この対立における勝利を決定づけるものは、社会主義世界体制の経済発展が資本主義の生産を追いこすことであり、これの一日も早い達成を保証するものが世界平和であると考えられている。今日の世界の主要な対立は帝国主義者の戦争勢力とソ同盟・中国を先頭とする諸国人民の平和勢力の対立であり、その根底には経済的矛盾を帝国主義戦争——その目標は主として社会主義世界にむけられている——によって解決しようとする傾向と、

急速な経済的成長と生活の向上のために平和の維持を必要とするところの、そして、もはや今日の段階において、すでに世界戦争を阻止しうる勢力にまで発展したところの、社会主義諸国や新たに独立した後進諸国および資本主義諸国内の人民の要求との対立がある。そして、こうした全過程を根底において規定しているのは、今日の状態にまで成長・発展してきたところの、資本主義から社会主義への移行を必然とする社会発展の法則——生産関係は生産力の発展に照応しなければならないという法則——にほかならない。

このような世界の主要な対立・矛盾を出発点とするとき、経済学の原理的展開はどのようなものでなくてはならないであろうか。今のところ、それは移行の現段階的過程をもふくむいわゆる「広義の経済学」が現実の問題とならねばならないであろう、ということがいえるだけである。